

# 序 章



中央アジアは、19世紀後半に帝政ロシアの植民地とされた後、1917年のロシア革命を契機として政治、社会、文化のあらゆる領域で社会主義化を経験した。およそ70年にわたるソ連時代に、ここでは現代世界でも他に類をみないほどの大規模な変革が進行した。そして、1991年のソ連解体後、中央アジア諸国は新しい独立国家として国際社会に参入した。各国は、政治と経済の大転換をめざすとともに、国家と社会の安定をはかる努力を続けている。その過程で、中央アジアの人々も大きな変容を相次いで経験してきた。しかし、彼らは自分たちが生きてきた様々な時代を分析し整理する機会を十分に持たなかったのではないだろうか。

独立を果たしたウズベキスタンは、多くの国々と国家間関係を発展させ、国際社会と積極的に関わり始めた。社会主義経済から市場経済への転換も始まり、政府は限定的ではあるものの改革を実行し始めた。その過程で、ウズベキスタン社会には統一感よりも経済的格差による社会分裂が生じている。変化の波に乗り遅れてしまった人々の多くは現状に満足できず、ソ連時代という過去を美化しがちである。多くの場合、この人々はソ連時代が現在よりも良かったと考え、彼らの間にはノスタルジーが広がっている。そのような傾向は、かつてのエリートや、社会でもっとも脆弱な層に顕著である。彼らは今なお過去に縛られ、起きていることすべてをソ連時代というフィルターを通して理解しようとする。確かに、現在中央アジアで起きていることの多くは過去と関連しており、ソ連時代のメンタリティや、その時代の物事に対する姿勢から影響を受けている。しかし同時に、過去の重要性はそこから教訓を得ることで現れるはずである。

以上をふまえ、本書では、現代中央アジアの変容を人々の記憶という観点か

ら検討する。具体的には、ウズベキスタンの人々が中央アジアの変容、そしてソ連時代をどのように記憶しているか、という問題・関心が研究の出発点になっている。本書は、これらについて調査を行った上で、人々の記憶と様々な歴史的事象の関連性を指摘し、個人的な歴史観の多様性を明らかにする。また、人々がソ連時代のどの部分について良かったと考え、どの部分について悪かったと考えているのかも明らかにしたい。それらをもとに、ウズベキスタンの人々がソ連解体とウズベキスタンの独立を望んでいたのか否か、彼らが望んでいたとすれば、自分たちの社会や生活のいかなる部分を変えるために独立を望んでいたのかを分析する。独立を達成してから19年が経った今、彼らはソ連という国と時代をどのようにみつめ、ウズベキスタンがどのように発展してほしいと考えているのだろうか。

本書の特徴は、人々の記憶に残った日常生活のエピソードや様々な記録を収集し整理したことである。また、社会主義時代の出来事について彼らの生の声をインタビュー形式で記録した。本書は、人々の日常生活と、当時彼らが経験した歴史的事象とをすり合わせることで、大きな変容の只中にあった人々の生活がどのようなものだったのかを示している<sup>1)</sup>。その結果、政治的な出来事と人々の生活はやはり同じものではない、というのが本書のメッセージであり著者の見解である。ソ連時代、人々の生活と政治は少なからず乖離していた。そのことから、本書は、当時の一般の人々がどのような生活を送っていたのか、生活と政治はどのような関係にあったのか、という点について検討を行った。

さらに、本書では、ソ連崩壊に至った70年間の歴史を人々の生活を通して読み解くことで、ソ連崩壊を引き起こした原因について分析を行った。この点については、ソ連崩壊は避けられなかったというのが一般的な認識になっている。しかし、それは本当に避けられないことだったのだろうか。もしも一般国民からみて避けられないことだったとすれば、人々はどの部分に不満を持ち、いかなる部分に満足していたのかを明確にする必要がある。以上を通して、ソ連時代とその後の時期における様々なステレオタイプを打破し、時代の複雑さを指

---

1) オーラルヒストリーの研究方法に対する批判的な見解に関しては、興味深い分析がある。Wulf Kansteiner, "Finding meaning in memory : A methodological critique of collective memory studies", *History and Theory*, N. 41 (2002), Wesleyan University, 179-197 頁参照。

摘することが著者の狙いである。

ウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国が独立してから19年が経過した現在でも、この地域の現状や本書が取り上げるような問題・関心については単純化された議論が散見される。これらの諸国の歴史と現状を正確に理解する上で不可欠であるはずの具体的な事例が挙げられることも決して多くない。さらに、ソ連時代を経験した人々は現在40代から80代になっており、彼らの証言や考え方は今のうちに記録しておかなければならない。彼らが亡くなると、人々の記憶に関する言説が推測に過ぎないものとなり、政治的に操作されやすいものになってしまう懸念もある。本書は、このような課題を少しでも克服することを目的としている。

## 1. 記憶の収録：方法と課題

### 歴史を考え直すための三つの手法

ウズベキスタンの人々の日常生活を通して歴史を検討するにあたり、著者は以下三つの手法を組み合わせ使用した。このような三つの手法を組み合わせることは、本書が取り組むような分野では一般的に使われており、triangulationと名付ける研究者もいる。

第一の研究手法は研究対象になる人々の中に入り込み、一定の時間を過ごしながらか観察し、インタビューを実施することである<sup>2)</sup>。そのような手段を用いる意図は、ソ連時代のウズベキスタンにおける人々の日常生活は具体的にどのようなものだったのか、対象者らの人生にいかなる特徴と相違があったのか、そして、それらがいかに当時の時代的特徴やウズベキスタン、より広くいえばソ連の政治状況を表していたのかを探るためである。

第二の研究手法は、ソ連時代のウズベキスタンに関する情報、ステレオタイプ、文献などを批判的観点から再検討することである。ここでいう批判的観点とは、単に「何かに共感できないから批判する」のではなく、ソ連時代のウズ

---

2) 類似の聞き取り調査を通して一般の人々の経歴と国の歴史をすり合わせ、歴史の理解を試みることについては、Susan A. Crane, "Writing the Individual Back into Collective Memory", *American Historical Review*, Vol.102, N. 5, December 1997, 1372-1385頁参照。

ベキスタンにおける人々の社会参加、ものの見方、国家に対する姿勢などに関して、従来の理解とインタビューによって現れた現状とを照らし合わせ、両者の相違を追及することである。そして、もう一步踏み込み、ソ連時代のウズベキスタン社会について誤解があったとすればそれはなぜなのか、そのような誤解がどのように形成されたのかを探る。

第三の研究手法は、インタビュー対象者がソ連時代における人々の生活について述べたことをもとに、当時の日常を再現する一環として、「参加型」の研究を試みることであった。インタビューの際に様々な疑問をなげかけ、回答者に刺激を与えた。これは、著者と研究協力者が、インタビューに応じた人たちとともにソ連時代のウズベキスタンにおける人々の日常生活の実態、問題点、利点を共同で考えることを意図している。その手法のコンセプトは、家族もしくは親戚、友人などによる内輪の人生話である。単に1人が語ることを皆で聞くのではなく、そこで交わされる話を聞き、インタビュー回答者や実際にインタビューを行う研究協力者が話し合いに参加する。そのような仕組みを通して、ソ連時代の日常生活と人々がどのような考え方のもとで生きていたのかをより明確にしていく。話し合いの成立過程と仕組みについては次節で詳説する。

本書では以上三つの研究手法が中心となっているが、それらを補完するために、インタビューの観察（テープと個人的な観察）や、インタビュー内容に関連する資料の収集・分析も行った。

### インタビュー実施とその過程での迷い

著者がソ連時代における人々の日常について研究を行うことを決めた時、もっとも大きな課題はそれをどのように行うかであった。外国の研究者がインタビューを行う際に典型的な方法として用いられるのは、現地に入り対象者に質問を行うことである。しかし、このような方法には複数の問題点がある。その一つは外部者が対象者からどの程度本音を聞きだすことができるかである。著者はウズベキスタン人であるが、15年にわたって日本に住んでおり、外部者といっても過言ではない。とはいえ、内部者だけでそのような研究を行うことも難しい。なぜならば、彼らはすでにインタビューの回答者と顔見知りであり、それが様々な問題を引き起こすからである。

例えば、本研究のインタビューでもみられたが、回答者はインタビューを実施する内部者に対し具体的な話をせず、今までの付き合いや歴史を前提に様々なことを語ってしまう。回答者はしばしば「誰々が『ああいう』生き方をしたから人生に失敗した」とか、インタビューを実施する家族に対し「あなたもよく知っているから私がここで改めて言う必要はない」などと核心部分を省略してしまう。これでは回答者の知識を十分に聞きだすことはできない。そこで、著者は、現地の研究者と外国の研究者が協力すれば、聞き取り調査とその分析はよりスムーズに行われ、その結果もより客観的なものになると考えた。しかも、最終的には、そのような聞き取りの仕組みが、いわゆる「外部者」と「内部者」との間に共通認識を生みだすと考えた。

以上のことから、著者は現地の大学にパートナーを求めた。そのようなパートナーとして協力してくれたのは、タシケントにある世界経済外交大学のラフモノフ教授とジュラエフ助教授であった。パートナーの役割は、質問項目の精査、調査対象者全般の選択、そして、家族内の話を聞き取る上で適切な学生の選択などいずれも非常に重要なことであった。

#### インタビュー方法の模索—本音を聞きだすために—

もう一つの課題は、どのようにインタビューを行えば人々の本音を聞きだせるかである。中央アジア地域で本音を語ってもらうことはなかなか難しい。その理由は必ずしも政治的プレッシャーだけではなく、より重要なものとして、彼らのメンタリティの特徴が挙げられる。つまり、自分たちにとって恥になるようなことは外に出さない、という考え方があり、結果として過去や自分たちの人生を美化してしまう場合もあるのである。

当初は研究者が対象者に質問するような一般的なインタビューを行う案もあった。しかし、それに加え、家族間の会話そのものを記録するのがもっとも効果的かつ合理的だと判断した。具体的に言えば、現地のパートナーである大学の学生50人程度を選び、地方出身者や、祖父母がいるような人たちに家族と会話をしてもらう。例えば、学生が結婚式で故郷に帰った時に祖父母と話した内容をそのまま記録する、というような方法である。あくまでも、家庭内の話し合いというような形で祖父母に話を聞いてもらう。孫に対する話なので、嘘を

ついたり美化したりするようなことは、外部者に対してよりは避けられるはずである。この手法には課題ももちろん多いが、興味深い試みでもある。人々の本音を聞きだすだけでなく、その家の人々が現在まで生きてきた過去について話し合い、その歴史を整理する機会になる可能性もあるからである<sup>3)</sup>。

しかし、実際にどのような方式でインタビューを行うのかについては複数の疑問があった。現地の協力者と相談した段階では、三つのインタビュー方法が候補に挙がった。一つ目は、構造的に完成した質問票を厳密に守ることである。このような質問票の利点として、問いや文言が煮詰められており、回答者に求められることも明確である。しかし、本研究の本質的な目標や中央アジア・ウズベキスタンの人々のメンタリティを鑑みれば、そのような質問票に沿ってインタビューに臨んでも、表面的な回答しか得られない可能性が高い。そこで二つ目として、質問の抽象度が非常に高く、回答内容に関しても自由度が高い質問票を作成し、会話の中で出てくる課題について話し合ってもらったことであつた（この方法はopen-ended interviewともよばれる）。人々に回答について完全な自由を与え、話したくないことは話さなくてもよいような空間をつくることで、質問者と回答者の間に話しやすい雰囲気生まれる。しかし、問題点として、おおまかな質問票に基づき、関心も理解も異なる人々が異なるテーマで話し合うと、結果を比較できないデータセットができあがる恐れがあつた。

そこで、著者は、これら二つの方法の中間を選んだ。ある程度厳密に決められた質問で構成される質問票を作成した上で、回答者にある程度の自由を確保し、回答者が答えたい項目だけに答えてもらう形でインタビューを実施した（この方法はsemi-structured interviewとよばれる）。質問票も単純な質問で成り立つのではなく、まず軸となる質問があり、それに複数の短い質問が付随する。短い質問には軸となる質問の主旨を明確化させる機能がある。インタビューを行う際には、二つ目に挙げた方法（open-ended interview）も部分的に利用したものの、大多数のインタビューは三つ目の方法で行われた。

以上のようなサンプリング方法の利点は、多くの人の生き方を記録できるだけでなく、その証言の信憑性を高めることであつた。特に、学生である孫と祖

3) キルギスのアメリカン大学において、メディアコースの一環として似たような試みが行われたが、本プロジェクトとは内容、目的、サンプリング、聞き取り対象者などが本質的に異なっている。

父母の家庭内の話し合いを通して世代間で同じテーマで話し合ってもらう方が、フォーマルなインタビューよりも自然である。また、インタビュー結果の内容も、質問が厳密に決められたアンケートや抽象度が高い質問票よりも興味深い。

### インタビュー対象者の選定

人々が語る歴史は、それを誰に聞くかに左右される。回答者の選定方法はいくつがあるが、本研究においては主に四つであった。すなわち、① 極端な事例を選ぶこと (deviant case sampling)、② 同類の社会的背景を持つ人を選ぶこと (homogenous sampling) ③ もっとも多様な事例を扱う (maximum variation sampling)、④ ネットワーク・サンプリング (network sampling) である。まず、著者は、本研究に便利な事例を扱うこと (convenience sampling) や類似した事例を扱うことを避けた。むしろ、可能な限り、異なる人生をきたた人々を選び、生き方の多様性を明らかにすることに努めた。そのために、著者は上述の方法の中から主に③を選択し、知り合いや研究者、様々な人の親戚ネットワークなどを活用してインタビュー回答者を集めた。ただし、ウズベキスタン全州から対象者を見つけることを前提とし、首都のタシケントや人口・面積の面で大きな州から5～6人ずつ、小さな州から2～3人ずつを選んだ。

各地のインタビュー対象者の数を増やすことができれば理想的だが、少なくとも本書の研究の目的において回答者数は十分だったと考えられる。なぜなら、本書の研究目的はウズベキスタンに生きる人々すべての生き方を把握することではなく、あくまでも釣り合いのとれた限定的範囲を対象とすることを想定していたからである。資源と時間が限られている以上、ウズベキスタンの人々が生きた歴史の日常について、その一部でも明らかにすることができれば、それは将来的には類似した研究の役に立ち、結果的にこの分野の発展につながると考えられる。本書は、今回の試みがそのような研究の端緒に過ぎないという認識に基づいている。

上述のインタビュー対象者数を確保するため、著者とその協力者はインタビュー対象を選定する際にネットワーク・サンプリングも利用した。それは、世界経済外交大学のラフモノフ教授やジュラエフ助教授の協力を得て、各州出身の大学3～4年生を集め、出身地や両親・祖父母の話聞いてもらうことであ

る。その中から30人程度を選び、各々が実家に帰った時に両親・祖父母と家庭内の話をしてくるよう頼んだ。ほとんどの学生は会話をメモリースティックに記録したが、ビデオテープにも記録した学生がいた。さらに、世界経済外交大学以外のルートでもネットワーク・サンプリングが行われた。特に、タシケント、サマルカンド、ブハラといった地域に関しては、興味深い人生を生きた人々を探し出し、インタビューを行った。いくつかの例に関しては、インタビューの信憑性の検証も兼ね、著者が再度その地域を訪ね、人々にインタビューを行ってテープに録音した。

以上の方法を適用したところ、以下のような回答者がインタビューに応じてくれた。

No.	名	関係	性別	年齢	民族	居住地	学歴・職業
1	M	親戚	男	66	ウズベク	タシケント	中等・長老
2	Y	知り合い	男	61	ウズベク	タシケント	高等・教員
3	A	叔母	女	不明	ウズベク	タシケント	高等・医者
4	S	同僚	男	65	ウズベク	タシケント	高等・エンジニア
5	A2	同僚	男	45	タタール	タシケント	高等・医者
6	E	同僚	女	48	タタール	タシケント	中等・看護婦
7	V	同僚	女	41	ウズベク	タシケント	中等・看護婦
8	Sh	先生	男	60	ウズベク	タシケント	高等・教員
9	U	父・友人	男	55	ウズベク	タシケント	高等・教員
10	Yu	父・友人	男	60	タタール	タシケント	高等・部長
11	D	知り合い	女	65	ウズベク	タシケント	高等・医者
12	P	知り合い	女	60	ウズベク	タシケント	高等・エンジニア
13	M2	同僚	女	56	ウズベク	タシケント	中等・看護婦
14	M3	同僚	女	53	ウズベク	タシケント	中等・看護婦
15	A3	同僚	女	53	ウズベク	タシケント	高等・医者
16	M4	同僚	女	63	ウズベク	タシケント	中等・看護婦
17	N	同僚	女	54	ウズベク	タシケント	高等・医者
18	L	同僚	女	62	タタール	タシケント	高等・医者
19	O	叔母	女	46	タジク	サマルカンド	高等・医者
20	R	親戚	男	50	タジク	サマルカンド	中等・無職
21	L2	親戚	女	63	ロシア	サマルカンド	高等・無職
22	A4	親戚	男	45	ウズベク	ナマンガン	中等・労働者
23	Sh2	親戚	女	46	タジク	タシケント	中等・労働者



No.	名	関係	性別	年齢	民族	居住地	学歴・職業
24	Si	祖父	男	56	ウズベク	アンディジャン	高等・教員
25	Ab	祖母	女	83	ウズベク	ナマンガン	高等・教員
26	Ra	祖母	女	83	タタール	ナマンガン	高等・教員
27	F	叔母	女	49	ウズベク	ナマンガン	高等・建築家
28	V2	知り合い	女	77	ロシア	ナマンガン	高等・教員
29	V3	知り合い	女	84	ロシア	コーカンド	高等・教員
30	V4	知り合い	男	73	ロシア	アンディジャン	高等・公務員
31	Al	知り合い	女	75	ロシア	アンディジャン	高等・医者
32	G	知り合い	男	55	ウズベク	アンディジャン	高等・医者
33	M5	知り合い	女	93	タタール	アンディジャン	中等・公務員
35	M6	父	男	60	ウズベク	タシケント	高等・教員
36	M7	父	男	55	ウズベク	タシケント	高等・教員
37	M8	叔母	女	70	ウズベク	タシケント	高等・定年
38	In	親戚	男	80	ウズベク	フェルガナ	高等・定年
39	An	叔父	男	72	ウズベク	フェルガナ州	高等・定年
40	M9	親戚	男	64	ウズベク	フェルガナ州	高等・定年
41	M10	親戚	男	50	ウズベク	フェルガナ州	中等・実業家
42	F2	親戚	男	55	ウズベク	コーカンド	高等・定年
43	F3	親戚	男	45	ウズベク	コーカンド	高等・経理
44	D	親戚	男	45	ウズベク	コーカンド	高等・経理
45	A5	親戚	男	70	タジク	ブハラ州	中等・農民
46	K	祖父	男	68	タ・ウ	ブハラ州	中等・農民
47	Q	祖父	男	71	ウズベク	ブハラ州	中等・村長
48	Mir	親戚	男	83	タ・ウ	ブハラ市	高等・教員
49	So	伯母	女	80	タジク	ブハラ市	中等・労働者
50	R	親戚	男	67	タ・ウ	ブハラ市	高等・教員

タ・ウはタジク・ウズベクの区別が難しい事例

### インタビューと言語の関連性

インタビューで使用した言語と、回答者の表現や歴史に対する姿勢との間には関連性がみられた。インタビューはロシア語あるいはウズベク語で行われ、回答者の半数以上がウズベク語で回答し、残りはロシア語で答えた。当初、言語の選択がそれらに影響を及ぼすことはあまり想定されていなかったが、ウズベク語とロシア語とでは回答の内容に若干の違いが生じたことがわかった。

まず、同じ質問をロシア語とウズベク語で聞く場合、ウズベク語では若干柔らかい表現となり、質問内容の説明部分も長い。なぜなら、ウズベク語での会話では、物事を真正面から聞くよりも質問の背景を説明することが期待されているためである。それに従い、回答も柔らかい表現になる。質問の仕方も、一気に聞くのではなく相手が各部分を理解しているか確かめながら少しずつ聞いていく。これはウズベク人のメンタリティを反映している。日常生活において、人々は可能な限り柔らかい表現を使い、相手の意見を尊重する姿勢を示す。他方、ロシア語ではある程度直接的にものを言う。回答に隙が生じた場合も、他の回答で埋めるというよりは、その隙を突いてさらに質問するのが効果的であることが多い<sup>4)</sup>。

さらに、インタビューでロシア語を用いる場合には、質問を相手にぶつけ、質問の内容などについてはそれほど説明しなかった。それは、補足して説明する行為自体が、相手の能力を見下していると理解される可能性があり、ロシア語の会話ではあまり求められていないためである。このように、インタビューで使用する言語によって配慮する点に違いはあったものの、原則として質問の内容と実施方法については同じ基準を採用した。

### インタビューの進行形式

インタビューの多くはあいさつから始まる。あいさつは、その場にいる人の紹介や、家族の一員がインタビューを行うのであれば近況報告から始まる。特に、聞き手が孫や息子であれば、日常生活にまつわる様々な話から入り、少しずつ本題に入っていく。あいさつの時間は、それによって話し合いのペースが決まるという点で非常に重要である。また、家族内の話し合いという形式でインタビューが行われる場合、あいさつを交わす時間は、語り手にとってはこれから行われる話し合いに対して精神的に準備する時間であり、聞き手にとっては自分が質問したいことをどのタイミングで聞き始めるかを探る時間でもある。著者がインタビューに立会って質問をしたケースでは、語り手があいさつを通

4) 言語と聞き取り調査との関連は、今回の調査のみならず他の世論調査においても確認されている。例えば、アジア・バロメーター・プロジェクトの中央アジア諸国で行われた世論調査においても似たようなことが確認されている。

して相手（著者）を知り、安心して話すことができるかを見極めたと考えられる。いずれの形式においても、インタビューは、これからいくつかのことを聞きたいという呼びかけと、インタビューの主旨説明から始まった。

「われわれが行っている（協力者の場合「手伝っている」）のは、あなたのよう一般の方々的人生を知ることです。ソ連時代に起きたこと、出来事、人々の生活について知るためには、その時代を生きた方に聞くのが一番良いかと思い、今回はお話を伺おうと思って来ました。もしよろしければ、いくつかの質問に答えるとともに、自分の生きた人生について話してください。質問にはご自分をもっとも答えやすい形で答えてください。答えたくない、または自分に関係のない質問があれば答えなくても結構です」

家族間の会話形式の場合は、このような「固い」説明にはならない。聞き手は、大学で勉強する過程で親や祖父母の生き方に興味がわき、色々聞きたいことがあるので質問に答えてくれないかと頼む。

インタビューの質問内容は本章の最後に載せた。ただし、これらの質問はあくまでも多くの人々の記憶を蘇らせることを意図しており、決してこれらへの回答のみを求めているわけではなかった。例えば、多くの場合、インタビュー対象者は質問内容から外れたことを語った。聞き手はそれを止めることなく、語り手が語ったことについてさらに質問し、その中で関心があるテーマに関して様々な疑問への回答を見つけていった。

## 2. 日常生活からみた歴史の正当性—意義と特徴—

本書で著者が使用した手法は、主に、聞き取り調査、二次資料の収集、人々が自分で書いた人生の記録である。このようなアプローチを採用する日本の研究者は少なくなく、海外でも最近とみに注目されている。比較的最近発表されたものの中では、『ソ連と呼ばれた国に生きて』<sup>5)</sup>、『中央アジアにおける「帝国

5) 岩上安身、古田光秋、片岡みい子、正垣親一共著『ソ連と呼ばれた国に生きて』、JICC出版局、1992年。

の子供達』<sup>6)</sup> (以下、『帝国の子供達』) や、『過去に疲れさせられた (人たち)』<sup>7)</sup> (カッコ内は筆者注、以下同) や、『帝国の周縁における生活—ソビエト・キルギスのオーラルヒストリー』<sup>8)</sup> がある。これらは、聞き取り調査をもとに書かれた文献だが、その課題設定、認識、対象グループ、目的は本書と大きく異なっている。

例えば、『帝国の子供達』は、かつてキルギスに住み、ロシア語を話し「ロシア化」された人々を取り上げ、彼らのソ連崩壊後の状況や問題、そして現時点まで生きた人生に対する見方を、聞き取り調査や世論調査の結果、歴史的資料を通して考察した。ここで指摘しておくべきなのは、『帝国の子供達』は研究者としての観点からみて重要な課題を取り上げているものの、主な検討対象はいずれかの国家の国民全体、もしくは中央アジアの市民一般というよりもキルギス出身で「ロシア化」された人々であると強調している点である。この場合、「ロシア化」された人々を中央アジアの一般的な人々と解釈しないように注意を払わなければならない。なぜならば、そのような認識は、ロシア人もしくはロシア語を日常生活で話す人たちが社会内の特別な立場に置かれていたというソ連時代における特殊性を捨象することになるからである。

そもそも、「ロシア化」された人々といった場合、彼らの中には他地域から中央アジアに連れてこられ、指導的なポストなどに就いた人が少なくなかった。さらに、『帝国の子供達』が取り上げるキルギスの場合、キルギス語よりもロシア語を話すことが一般的だったとはいえ、ソ連時代に「ロシア化」されたキルギス人の多くは共産党員で仕事でも家庭でもロシア語を使っていた。しかも、彼らはソ連崩壊の影響をもっとも強く受け、社会的立場がソ連崩壊前後で180度変化したといえる。そのような背景をみれば、キルギス出身の「ロシア人、ロシア化」した人々を考察対象とした同書は、主旨や目的、手法などの点で本書と異なるものである。

『帝国の子供達』よりも本書に概念的に近く興味深いのは、1992年に刊行された『ソ連と呼ばれた国に生きて』や、近年刊行された『過去に疲れさせられ

6) Kosmarskaia, N.P., "Deti imperii" v postsovetsoi Tsentral'noi Azii: *Adaptivnye praktiki i mental'nye sdvigi: (russkie v Kirgizii, 1992–2002)*. Moskva: Natalis, 2006.

7) Marfua Tokhtakhadzaeva, *Utomlennye proshlym: Reislamizatsiia obshchestva i polozenie zhenshchin v Uzbekistane*, Tashkent, 2001.

8) Sam Trantum, *Life at the Edge of the Empire: Oral Histories of Soviet Kyrgyzstan*, Bishkek: American University of Central Asia, 2009.

た（人たち）』、『帝国の周縁における生活—ソビエト・キルギスのオーラルヒストリー』である。これらは、聞き取り調査の実施、対象グループの選択基準といった点で本書と共通する部分がある一方、異なるのはテーマや調査対象のジェンダーである。

『ソ連と呼ばれた国に生きて』は、ソ連崩壊前後の知識人の生活や人生について興味深いエピソードを紹介している。これは、ソ連崩壊前後の人々の思いやソ連という国と人々のアイデンティティの実感を表すとともに、ロシア人やロシア在住の人々を中心とした貴重な生のデータを提供している。しかし、本書はこの『ソ連と呼ばれた国に生きて』とはインタビューの対象者、時期、インタビュー結果の使用方法などにおいて異なっている。本書が焦点をあてるのは、ソ連崩壊前後ではなく、ソ連が崩壊してからソ連を構成した共和国が独立を得て一定の期間がたってからの時期に人々が思い出すソ連の記憶である。インタビュー対象者も比較的恵まれた生活を送っていたモスクワやレーニングラードではなく、モスクワから地理的にもそれ以外の面でも周縁にあった中央アジアのウズベキスタンの一般人である。本書では、『ソ連と呼ばれた国に生きて』が提示したソ連のアイデンティティや人々の意見把握の課題を土台としつつも、中央アジアの一般人の歴史観やソ連に関する記憶を論じていく。

『過去に疲れさせられた（人たち）』の目的は、社会主義時代後の社会変動を、イスラームの復興を背景として女性の目線から考察することである。そういう意味では、『過去に疲れさせられた（人たち）』のテーマはイスラームと女性の立場の関係性であり、本書が検討対象とする一般の人々の生活を通した歴史観よりも限定されている。

同じくウズベキスタンはアンディジャンの研究者ジャリーロフは、革命後の1920-30年代にソビエト政権との戦いに敗れて、あるいはその抑圧を避けて国外に逃れ、最終的にサウディアラビアに生活の場を築いた人々を訪ね、彼らの波乱に満ちたライフストーリーを記録している<sup>9)</sup>。著者によるインタビュー調査は、1994-97年間に行われた。中央アジアの郷土を去った彼らムハージル（移住者）の証言は、中央アジアに残った人々のそれと比較すると興味深い。

9) Jalilov, Sayfiddin, *Bukhoriylar qissasi : Muhojirat tarixidan lavhalar*. Toshkent: Islom Universiteti Nashriyoti, 2006参照。

『帝国の周縁における生活—ソビエト・キルギスのオーラルヒストリー』は、キルギスにあるアメリカン大学の教員と学生を中心としたコースワークの一環として発足したプロジェクトの成果である。具体的には、学生が集めたキルギスの一般の人々の生活に関する数十人の証言をまとめたものであり、その狙いは証言結果の分析よりも証言の記録と文書化であった。

### 誰かと共に歴史を考えること

すでに述べた本書の手法からも明らかなように、本書は誰かについてではなく、対象グループの人々とともにソ連で起きた様々な出来事について検討することに重点を置いている。多くの人類学者や社会学者は、対象社会を観察し、その社会に起きていることを自分たちの目を通して表現する。しかし、本書の大きな目的の一つは、ウズベキスタンに起きた様々な出来事を観察しつつ、インタビュー対象者とともに考え、整理、理解、再検討していくことである。歴史は生き物であり、語り手や聞き手によって形成される。本書にある試みはそのような歴史を一般の人々の日常生活を通して構成することである。そういう意味では、本書に関わった現地の協力者は、著者の分析対象というより、彼らの人生を通してソ連の歴史を教えてくれるパートナーであった。

そのような仕組みは、書かれた歴史、公式な歴史と、人々が語ってきた歴史もしくは人々が実際に生きてきた歴史の間のギャップを埋めることにつながる。現地の協力者にとって、本書の作成過程は、自分の人生を語ることを通して、単に自分の人生と歴史の流れを整理するだけでなく、これまでの人生を再検討する機会でもある。

### 個人のライフストーリーを通じた社会の多様性の追求

インタビューでそれぞれの人生について語ってもらうことは、様々な出来事が人々の当時の考え方や現時点の認識にどのように影響を与えたのかを探る手がかりとなる。本書の大きな目標の一つは、インタビュー回答者の個々の人生を描くのではなく、多くの人々の人生を通して、当時の生活の多様性と政治的な事情の変化に対する人々の反応と対応を分析することである。そのために、始めから終わりまで整然とした人生よりも、人々が日常の中で直面する矛盾やジ

レンマをどのように乗り越えてきたかを探る。

その意味では、協力者が自分の人生について語った内容だけでなく、現在の視点からみた当時の行動の評価や疑問視点も興味深い。これは、従来の中央アジア研究にみられたような、人々の考え方や生活の一般化・分類化ではなく、その多様性を見出すことにつながる。

すでに述べたように、著者は本書で三つの手法を使用した。つまり、まず、「生」のデータ（インタビューの内容）を収集する。次に、その「生」のデータを整理する。そして最後に、インタビューの内容をどのように理解するか、それらが今日の日常生活にどのような影響を与えているのかなどを述べる。その際、著者が使用した方法は、インタビュー対象者の個人レベルの話に注目することと、それらをウズベキスタンの歴史的な出来事と関連付けることである。それは、カメラにたとえれば、ズームインしたり、その「写真」の奥にあるもっと大きな背景をみるためにズームアウトしたりすることに近い。ただし、インタビューを掲載する際は、可能な限りそのまま掲載し、インタビューで得られた情報を共有・公開することと同時に、インタビュー対象者の声をそのまま読者に届けることに重点を置いた。そういう意味では、本書の中心はあくまでも一般の人々の日常生活であり、それがあって初めて様々な歴史的な出来事と人々の生活を関連付けることが可能になる。

### 3. 現地調査における課題

#### 概念的な課題

本書の研究においては、手法以外でも重要な課題が多い。「概念的な挑戦」としてまず挙げられるのが、「記憶」は本当に記憶なのかということである。例えば、人々が他者から得た情報を、記憶として自分の頭の中に記録してしまう事態も十分考えられる。人々の記憶を検討対象とする上では、このような限界があることを著者は認識している。

さらに、「時代から影響を受けた『記憶』」という問題がある。独立した現在、人々は、「スターリンが悪かったのだ」とか「スターリンがこういうことをした」というような当時の細かな話を聞き、それらに基づいて、自分たちの考えを構

成してしまう。また、現在の立場によっても「記憶」は異なる。つまり、現在非常に裕福な生活を送っている人々の「記憶」と、貧しい生活を送っている人々の「記憶」とはまったく異なる。なぜなら、現在は彼らの「記憶」にもっとも影響を与えるファクターの一つであるからだ。つまり、ソ連時代が良かったのかどうかを、自分たちの現在が良いかどうかによって判断する人々が多く、ソ連が崩壊すべきだったのか、それともソ連に未練があるのかといったことは、それを判断する人の現在の立場によって大きく違ってくる。そのため個人的な体験で時代を語ってしまう人も少なくない。しかし、これについては、われわれとしては弱点というよりもむしろ利点ではないかと考えている。つまり、人々が個人的にその時代をどう見たのかを知ることが、われわれの目的でもあるからだ。

#### インタビュー実施における課題

次に、サンプリングの制限がある。サンプリングの面では、すべての地域の人々の生活を反映するよう努めたが、それを完全に達成することはできなかった。本書で使われているインタビューは、主にタシケント市と州、サマルカンド市と州、ブハラ市と州、ナマンガン市と州、アンディジャン市と州、コーカンド市、フェルガナ市と州で実施された。主な都市やフェルガナ州のように人口密度が高い地域をサンプリングに反映させることはできたが、カラカルパク共和国などアクセスしにくい地域の出身者は今回の対象者に入っていない。そのような地域の人々について調査することは将来の課題である。

サンプリング以外の課題もある。各国の政権の性格によっては、このような研究が行いにくい場合がある。それはウズベキスタンを含むすべての中央アジア諸国にいえるが、それでもカザフスタン、タジキスタン、キルギスでは比較的行きやすく、本書が現地のパートナーとの協力に基づいて行われたのはまさにそのためである。著者は、得られた情報すべてを彼らと共有し、双方がその情報を利用できる態勢を確保した。

政治的な制限がある国の場合、対象者の考え方も政権から影響を受けないわけにはいかない。実際に政権から圧力がかけられなくても、対象者が自己制限を行い、何が政治的に「正しい」か「正しくない」かを自主的に判断し、政治的



に「正しい」と思うことだけを語ったという可能性を考慮に入れる必要がある。

また、インタビュー内容のすべてを可能な限り記録しようと努めたが、やはり記録できない場合も生じた。また、インタビューに応じてくれない人々も、著者が想像していた以上に多かった。一つの教訓になったのは、それは「政府から具体的に何か言われて拒否したというわけではなかった」ということである。これも不思議なメンタリティであるのだが、「念のため、拒否しておく」というのが基本的な考え方になっているようだ。「インタビューに応じなければ問題は無いが、応じれば何か生じる可能性がある」といった見方だろう。インタビュー実施にあたって予測していた数と比べると、回答率は半分にも満たず、ネットワークング方法で対象者に接触したにもかかわらず断られた件数も非常に多かった。

インタビュー実施に関わった協力者の話では、辞退者が多く出ると思われたフェルガナ盆地では前向きな対象者が多かった一方、サマルカンド市やサマルカンド州で辞退者や録音に否定的な対象者が多かったようである。その主な理由として、協力者と対象者の信頼関係が挙げられるが、それ以外の要素も大きく影響したと思われる。特に、サマルカンド市で辞退者が多かったことと、アンディジャン事件以降、政府当局の厳しいコントロール下にあるフェルガナ盆地で対象者が前向きな姿勢をとったことを説明するのは難しい<sup>10)</sup>。協力者とこのような矛盾を分析したところ、その可能性として、中央アジアで人口密度がもっとも高く様々な問題を抱えるフェルガナ盆地の人々は、厳しいコントロール下に置かれているからこそ、自分たちの話を家族内で言い、しかも誰かにその話を聞いて欲しいので、政府当局のコントロールがそれほど厳しくないサマルカンドの人々よりも積極的な姿勢を示したのではないかと思われる。しかし、そのような矛盾を検証するには追加のデータが必要である。本書では、インタビュー実施にあたり以上のような問題があったことだけを指摘しておきたい。

さらに、インタビューでは、他者の介入というのが非常に困った要素であっ

---

10) 2005年5月13日、アンディジャンで流血の惨事が起こった。それは、正体不明の反政府武装集団が軍施設や刑務所などを襲撃、州庁舎を占拠した後、治安部隊との間に銃撃戦が起こり、州庁舎前にいた婦女子を含む市民に250人を超える死者を出した。事件はフェルガナ地方一帯に緊張状態をもたらした。国際社会にも大きな衝撃を与えた。政府はイスラーム過激派組織アクラミーヤの仕業と断定したが、「市民の虐殺」を非難する欧米諸国との関係は急速に冷却した。

た。例えば、孫による祖父へのインタビューで、その息子、つまりインタビュアーの父が脇にいる。この場合、祖父の答えは、横で父が言っていることの影響を受けてしまいがちである。しかし同時に、このような年齢の人にインタビューするには、質問の内容がよく理解されていないということも生じる。横に頼りになる誰かがいるということは、その質問をわかりやすく説明してくれる利点もあり、プラスマイナス両方の側面があると考えられる。近親者のインタビューへの参加や質問の解釈を制限すればインタビューそのものが成り立たず、制限しなければインタビューされる人の回答が近親者の解釈などに左右されてしまうことがある。この点を今後どのように解決すべきか考えていきたい。

## 本書の構成

本書では、まずウズベキスタンの歴史と特徴を述べる。また、ウズベキスタンの歴史を検討する流れにいかなる特徴があったのかを指摘する。次に、各時代に生きた人々の日常生活を通して、各時代の特徴、人々の評価、彼らが自分の人生を振り返る際の反省点などを述べる。本書は二部構成から成る。一部（第2章～5章）では、歴史の流れに沿って各時期をウズベキスタンもしくはソ連の指導者の名前で分けている。すなわち、ソ連成立・ウズベキスタン成立期、スターリン時代、フルシチョフ時代、ブレジネフ・ラシードフ時代などである。このような歴史的な流れに加え、二部（第6章～9章）では様々なテーマを挙げる。例えば、イスラーム、コミュニティのあり方や変容、ソ連時代の民族政策やソ連時代に対する人々のノスタルジーなどである。

## 確認票

回答者カード No.01-01

1 生年月日	7 受けた教育による専門
2 出身地	8 ソ連時代の職業
3 性別	9 現在の職業
4 民族	10 家庭状況（既婚・未婚）
5 居住地（時期ごとに）	11 子ども（何人）
6 教育	12 その他の情報

## 質 問 票

1. まず、自己紹介をしていただき、ご自身の家族やその歴史について少し話していただけますか。例えば、ご両親・祖父母は誰であり、兄弟が何人かについてお話し下さい。
2. ソ連時代を現時点で振り返った時、それはあなたの記憶にどのように残っていますか。ソ連時代に関してどのような良い記憶がありますか。何がもっとも良くない記憶として残っていますか。
3. あなたの記憶に1920年代の話はありますか。例えば、当時の集団化や様々な国家政策について何か覚えていますか。
4. 歴史上、ソ連の指導者としてスターリンという人物がいました。もし彼が最高指導者としてソ連を運営した時期を「スターリン時代」と表現できるならば、あなたはその時代をどのように覚えていますか。当時のあなたやあなたの家族の生活はどのようなものでしたか。スターリンの政策、行動や死をどのように覚えていますか。
5. 第二次世界大戦の時期を覚えていますか。それをどのように覚えていますか。どのような生活状況でしたか。経済状況はどのようなものでしたか。もし経済的な問題があったとしたら、それはどのようなものでしたか。それをあなたやあなたの家族はどのように乗り越えましたか。戦争中に亡くなられた親戚や家族がいましたか。
6. 第二次世界大戦が終わり、平和な時代がきたかと思いますが、それをご自身の日常生活を通してどのように覚えていますか。当時をソ連共産党書記長のフルシチョフの時代とみなした人も少なくありませんでした。あなたの人生や生活の中でフルシチョフの時代はどのような時期でしたか。この時期、あなたはどのような出来事を経験し、あなたの人生はどのような段階でしたか。
7. 以上の時期の後、どのような時代がきましたか。ブレジネフ書記長もしくはウズベキスタン共産党のラシードフ第一書記がソ連・ウズベキスタンの運営にあっていた時期を覚えていますか。彼らの政策はどのようなものでしたか。あなたやあなたの家族の生活にその政策はどのような影響を及ぼしましたか。この時期のあなたの生活においてもっとも大き

な出来事は何でしたか。この時期に、結婚、子どもの誕生、もしくは親戚の死を経験しましたか。

8. ソ連時代に宗教、民族、その他の行事はありましたか。ソ連時代の行事を覚えていますか。その行事をあなたはどのようにして知りましたか。また、あなたやあなたの知り合い、家族はそれを自由に行うことができましたか。当時、あなたはそのような行事をどのようにみていましたか。あなたの見方とあなたのご両親の見方は異なっていましたか。当時の社会状況はどのようなものでしたか。
9. あなたの宗教に対する考え方は、この20年間に変わりましたか。変わったとしたら、どのように変わりましたか。
10. ソ連時代のマハッラやコミュニティ、人々の近隣関係についてどのように覚えていますか。当時のマハッラと今のマハッラを比べて、どのような違いがあると思いますか。
11. あなたが子どもの頃に抱いた夢はどのようなものでしたか。その夢は実現しましたか。